

現地報告 奥日光・尾瀬における歩くガイドツアーの現状 — 特に高齢参加者の増加に着目して —

宮地 信良

江戸川大学国立公園研究所客員研究員

1. はじめに

国立公園の利用の基本的なもののひとつが歩く利用であることは言うまでもない。奥日光や尾瀬も歩くツアーが盛んな地域であるが、平坦な地形が多いため、ツアー参加者は高齢者の割合が多い傾向にある。高齢者は、働き盛りの中年や若者、あるいは家族連れとは違ったツアー志向や肉体的に留意すべき点を持っており、ガイド側もこのことを意識して業務を行う必要がある。本稿では奥日光や尾瀬地域で歩くツアーのガイドを行っている経験から、高齢者の歩くツアーの現状を紹介する。

2. 歩くツアーとアクティビティツアー

歩くツアーは、自然ガイド(ネイチャーガイド)と呼ばれるガイドが、自然の中を歩きながらインタプリテーションや自然体験などを行うのが一般的である。さらに自然の中でのツアーには、アクティビティそのものを楽しむ目的のアクティビティツアーあるいはアウトドアスポーツツアーともいべき分野がある。アクティビティとしては、シュノーケリング、ダイビング、カヌーやカヤック、ラフティングなどが代表的な

ものだが、最近はキャニオニング(溪流を歩き下る)、シャワークライミング(溪流を歩いて上る)、SUP(Stand Up Paddleboard=水面に浮かぶボード上に立ってパドルで漕ぐ、写真1)、トレイルランニングなど、そのメニューは広がりつつある。ただこの二つのツアー分野は明確に分かれているものではなく、両方の要素がミックスされているツアーも多い。スノーシューを使って歩くスノーシューイングツアー(写真2)やクロスカントリースキーウォーク、リバーウォーク付きツアーなどは歩くことが基本になるが、道具を使うことによって歩くツアーに加えてアクティビティの楽しさも体験できるものである。

3. 日光における自然系ガイド事業者の現状

日光市内の自然系ガイド事業者で作っている「日光自然ガイド協議会」加盟の事業者数は表1のとおりである。(スノーシューイング、クロスカントリースキーウォーク、リバーウォークなどを含むツアーは歩くツアー系に含めた)事業者の数は、歩くツアー系とアクティビティツアー系にほぼ二分されている。



(写真1) アクティビティツアー例：SUP



(写真2) 歩くツアー例：スノーシューイング

(表1)

	事業者数	主なツアー内容
歩くツアー系	9	自然観察ウォーク、フラワーウォッチング、バードウォッチング、トレッキング、滝探検とリバーウォーク体験、スノーシューイング、クロカンスキーイング等
アクティビティツアー系	7	キャニオニング、カヌーイング、SUP、アドベンチャーサイクリング、トレイルランニング等
合 計	16	

4. 高齢者ツアーの事例

次に、私が経験した中で高齢者の参加が多かったいくつかのツアーの事例を示す。

事例 1

「植物をテーマとしたツアー例—巨木を訪ねるツアー—」

花を見るツアーはシーズン中常時開催しているのだが、最近は気候が不順で開花時期がずれることが多く、参加者をがっかりさせてしまうことも増えている。また最近は花に関する情報がネット上で多く寄せられており、徐々にツアーに頼らなくなる傾向も感じられる。このため植物をテーマとした別の切り口として、「巨木」を訪ねるツアーを開催し、多くの参加者を集めつつある。巨木は知られていない場所にあることが多く、ガイドツアーならではの要素もあるようである(写真3)。

事例 2

「アクティビティを組み込んだツアー例 —リバーウォーク体験付きツアー—」

暑い夏に川のそばを通れば、誰もが「この冷たく、

透き通った川に入れたらどんなに気持ちが良いだろう!」と思う。奥日光には冷たく、透き通った水が流れる川が多くある。この中で水量が少なく、流れが緩やかな川を選び、これを体力や技術はあまり必要なく安全に歩けるアクティビティにアレンジしたのが「リバーウォーク」である。足を守るためにスポーツサンダル(またはぬれても良い靴)を履き、川の中でバランスを崩さないためにストックを使って流れのゆるい浅い川を歩く。参加者が高齢者の場合は、短い区間を往復する「リバーウォーク体験」を加える形とし、もし体の不調等があればいつでも引き返すこともできるようにしておく。危険はほとんどないが、全員に目が届くようにすることが必須なため、ガイドは2名つける必要がある。参加者からは「冷たい水がすごく気持ち良かった!」という声が多く寄せられている(写真4)。

事例 3

「ツアー中の怪我等の発生と対処例—尾瀬ツアー—」

奥日光では今までに怪我の事例はほとんどないのだが、尾瀬の鳩待峠から尾瀬ヶ原を往復するツアーでは、これまでに何度も怪我や脚の攣(つ)り、疲れて歩けなくなる等のトラブルが発生した。このコースは行きが尾瀬ヶ原まで下り道で、帰りが峠までの1時間強



(写真3) 冬の巨木ツアー参加者



(写真4) 高齢者のリバーウォーク体験

の上りコースになる。数時間歩いて脚が疲れた後、最後に標高差約200メートルの上りになるので、疲労からトラブルが生じやすいと考えられる。トラブルが生じた尾瀬のツアー例(ともにホテル主催)を2つほど紹介しておきたい。

A このツアーでは、ある参加者が鳩待峠への上り道の途中で下肢を階段に強くぶつけ、皮が約10cmにわたってむけて出血した。ガイドは持参した水で出血箇所を洗い流し、滅菌ガーゼで覆って包帯で固定する応急処置を行った。怪我人にはガイドが持参したストック2本を持たせて脚への負担を軽くし、ゆっくりだが峠まで自力で歩いて戻ることができた。マイクロバスを使ったホテルのツアーだったので、帰途は全員を乗せたバスが途中の病院に立ち寄ってホテルスタッフとけが人を下ろし、ガイドと他の参加者はそのバスですぐにホテルに戻った。怪我人はあとでホテルが別の車で病院からホテルまで連れて帰った。

B このツアーでは、80歳台と思われる参加者がやはり帰りの峠への上りで脚が攣(つ)り、歩けなくなった。ガイドは攣った箇所の筋肉のほぐしとマッサージを行ってから、ストック2本を持たせて脚の負担を軽減するようにしたが、その後も脚の別の場所の攣りを繰り返す、疲労もひどくなっているようだった。吸収の良いミネラルウォーターなどを飲ませて休憩と筋肉のほぐしを繰り返しながら、約40分ほど遅れて峠まで連れてゆくことができた。

これらの例では、ガイドおよび携行した応急処置用

品が無ければ救助を要請する事態になっていたと思われる(写真5)。

事例 4

「ツアー中にクマと遭遇した例―尾瀬ツアー」

事例3と同じコースの尾瀬ツアーの尾瀬ヶ原から鳩待峠への帰り道で、2回続けてツキノワグマに遭遇したことがあった。1回目は尾瀬ヶ原を出発して間もなく、道から100mほど離れた場所にクマを発見した。危険はないと判断したので、クマに出会った場合の行動方法についてその場で参加者にレクチャーを行った。それから約10分後、上りに差し掛かる曲がり角で、再び先頭のガイドから5mほどの至近距離で突然別のクマと遭遇した。先ほど話したことが実際に起こったわけである。話を聞いたばかりということもあってか、参加者は皆落ち着いてガイドの指示に従ってくれ、何事もなくクマは離れていった。直前にクマに遭遇した場合の対処法を話しておいたこともあって、参加者が皆落ち着いて行動してくれたので助かった(写真6)。

5. 高齢ツアー参加者の志向や留意点

奥日光や尾瀬の歩くツアー参加者のうち高齢のツアー参加者は、これまでの経験から一般的に次のような志向あるいは留意すべき点を持っている。

①きつくない道をほどほどに歩きたい

一応健康であり、歩きたいという気持ちは強いが、登山のようなきつい道や1日かけて歩くような長い道は歩きたくないという人が多い。年に数回、1日かけて長距離あるいは多少冒険的なきついコースを歩くツ



(写真5) ガイドが携行した応急処置用品の一部



(写真6) コース近くに現れたクマ(日光)

アーも行っているのだが、このようなツアーの参加者は比較的年齢層が低い。

②特に花や植物に強い興味を持っている

子どもはシカ、クマといった動物や昆虫、あるいは生きものに興味を示すが、年齢が進むにつれて花をはじめとする植物に強い興味を示すようになる。尾瀬ツアーに行くバスの中で「今日一番見たいものは何ですか?」と聞くと、ほとんどの高齢参加者は「花!」と答える。もちろん自然の風景や雰囲気も大きな要素のほうであるが、これらは事前にはあまり意識されないようで、尾瀬ヶ原を歩き始めてから「尾瀬は素敵ね!」と実感するようである。一方、奥日光では森を歩くコースが多いが、特にインパクトが強いのは巨木を見るコースで、「もう一度冬にこの巨木に会いに来てみたい!」と言われることがある。いずれの地域でも高齢者からツアー中に受ける質問で最も多いのは、圧倒的に植物に関することである。

③軽いアクティビティにも興味を示す人が増えている

たとえば冬のスノーシューイングや夏のリバーウォークなどのアクティビティの要素を含んだツアーは、強い印象を残すようである。はじめは「アクティビティは大変そう」と参加に不安を感じるようだが、一度経験してみると道具を使いこなす楽しさや、道具を付けることによって雪の中、冷たい水の中といった「普通と違う世界」を体験できたという新鮮な喜びがあり、アクティビティの虜になってしまう人も多い。

④体力があまりなかったり、体に自信がない部分が多い人が多い

半日のツアーに参加する人は、普段あまり運動をしていない人が多い傾向にある。また、「私は毎日〇キロ歩いています!」と言う方も、ほとんど都会の平らな舗装道を歩いているので、特に勾配のある上り坂になると息を切らしてしまう。また下り坂は、筋肉のほかにはバランス感覚が必要なので特に怪我が多い。また年齢とともにトイレが近くなる方が多く、申し込みの前にトイレの位置を聞かれる場合も多い。またトイレに近いことが原因でツアーの参加を控える人はかなり多いと思われる。このほか心臓にペースメーカーを入れている方など、見えないところにリスクを抱えている場合もあり、表面的に元気な方でも注意が必要である。

6. いくつかの提案

これまで述べてきた高齢参加者が多いツアーの事例

や参加者の志向や留意点を踏まえ、今後さらに増えると思われる高齢者の歩く利用やツアーを受け入れ、その質を高めるためにいくつかの提案をしたい。

(1) 公園管理側の対応

①「トイレ重点整備歩道」の整備を行う

これまでも公園管理者はトイレの整備に力を入れてきたが、高齢者が多く利用する歩道には、2時間に1か所程度のトイレを整備することが望ましい。ただしトイレには頻繁な維持管理作業が必要なので、設置の位置は車が入る場所であることが条件であり、対象となる歩道は限られてくる。このため高齢者の利用が多く、既存のものを含め2時間に1か所程度のトイレが整備可能な探勝歩道を「トイレ重点整備歩道」に指定し、ここに重点的にトイレの整備を入れる。そしてこれを広くPRすることで、今までハイキングをあきらめていた高齢者の歩く利用がかなり増えるものと思われる。なおトイレはすべてが立派なものでもなく、中間的な位置のものは簡素なもので良い。

②歩道のきめ細かい情報提供を行う

ビジターセンターや歩道入口の案内板には、多くの場合歩道の所要時間が書かれているが、その時間はガイドブックなどから引用したものなのか、概してかなり速いペースで歩く場合のものとなっている。高齢者でなくても、自然公園の歩道では観察、風景鑑賞などを行いながらゆっくり歩くことを想定すべきであり、所要時間は余裕のあるものになるよう再チェックをする必要がある。

また、歩道の勾配によって同じ距離でも体力的負担は大きく違ってくる。このためハイキング歩道を勾配によって全国共通のランク付けを行い、様々な広報手段や現地の案内図にはこのランクを色分けで示せれば、「こんなはずではなかった」というケースが減り、安全上も有益な情報となるであろう。

(2) ツアー主催者やガイド側の対応

①ツアー案内で必要な体力やトイレ情報等も知らせる

ガイドツアーに参加する人の大きな動機はツアーに参加することの楽しさだと思われるが、実際には次のような動機でツアーに参加する人もかなり多い。

- 体力や志向に合ったコースあるいは自分では行けないコースが分かる。
- 体調が悪くなったり、ばてた時にもガイドがいるので安心できる。
- クマやハチなどの危険に会わないように、あるいは会った時には何とかしてくれる。

電話での問い合わせや申し込みよりもネットでの申し込みが増えている現在では、ツアー主催者が事前にコースのきつさ、トイレ等についての十分な情報をホームページ上等で与えることで、「知らなかった」ことで起こる様々なトラブルを防ぐ必要がある。

例えば尾瀬のツアーについては、一般に平らな尾瀬ヶ原の写真しか見せられていない。このため山道の上下りがあるとは思わず、体力のない人が参加してしまう。PRの際は客寄せのキャッチフレーズだけでなく、ツアーに必要な体力やトイレの設置頻度、ツアー中の注意事項等についても知らせておくことが、ツアー主催者にとって必要なことである。

②ガイドの応急措置技術向上

歩くガイドツアー中に頻繁に起こるリスクとしては、低体温、熱中症、脚の攣(つ)り、外傷、捻挫骨折、蜂刺され等があり、まれにクマとの遭遇といったこともある。消防署の講習などで行われる心臓マッサージの実行やAED使用の頻度は実際には低い。従ってガイドとしては、現場で多く起こるリスクへの対応につ

いて十分にトレーニングを積んでおくことが必要である。そして実際に起こった事例について、事業者の枠を超えて広く共有化することが、ガイド全体の技術向上のために効果的である。この意味でも地域のガイド事業者が参加する自然ガイド協議会等の組織の存在意義は大きい。

7. おわりに

自然ガイドは、常に利用者と接してその声を聞いており、利用者のニーズや施設の問題点等を最も良く知っている立場にある。従ってガイドは国立公園の管理者と利用者をつなぐ存在とも言える。これまでは国立公園の計画や管理方針の策定に利用者の声を取り入れることが少なかったように思われるが、国立公園の主役は本来利用者であり、この声を反映させる一方法として自然ガイドを活用することが考えられる。そのためにはガイドもフィールドについて日常的に問題意識をもって行動することを心掛けなければならないと考えている。